



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	林芙美子「牛肉」論：「遊女」の転落物語
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 175, 1 (右) -23 (右)
Issue Date	2025-03-28
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.175.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94353
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_175_Mizutamari.pdf



林芙美子「牛肉」論

——「遊女」の転落物語

水 溜 真由美

1 はじめに

林芙美子の短編小説「牛肉」(『別冊風雪』第二号、一九四九年四月⁽¹⁾)は、満喜江(マキイ)の半生を描く作品である。横浜の本牧^{ほんもく}の高級娼館の「売れっ子」であった満喜江は裕福な外国人に身請けされるが、紆余曲折を経た後に吉原の下級妓楼の娼妓となり、さらに戦争末期に空襲に遭遇して精神を病む。

「牛肉」は「遊女」の転落物語である。⁽²⁾日本文学史上の女性の転落物語としては、井原西鶴『好色一代女』がよく知られている。『好色一代女』は懺悔物語の形式をとって書かれた女性の一代記である。⁽³⁾主人公の女性は一一歳余りで

官女勤めをしてから「好色庵」に隠居する六五歳の現在に至るまで、舞子、大名の側室、太夫、天神、鹿恋、端女郎、寺小姓、大黒、女祐筆、腰元、表使い、歌比丘尼、髪上げ女、介添女、お物師、茶間女、仲居女、茶屋女、妾、風呂屋者、扇屋の女房、糸繰り女、二瀬女、蓮葉女、暗物女、出女、紅売り、遣手、惣嫁など三〇以上の職業を転々とす⁽⁴⁾る。主人公の経験する職業に「遊女」に分類されるものが多く見られること（太夫、天神、鹿恋、端女郎、歌比丘尼、茶屋女、風呂屋者、二瀬女、蓮葉女、暗物女、出女、惣嫁など）、年齢を重ね谷色の衰えに見舞われることを考えれば、「転落」は必然とも言える。

宗政五十緒は「好色一代女」の構造において、『好色一代女』の物語が「内発的論理性」を持つこと、即ち主人公が「年齢」と「因果関係」（「後行する主人公の行動が、先行する彼女の行動によって制約されている」）に拘束されていることを前提として、作品の構成を次のように整理している。⁽⁵⁾

〈序章〉

一、公娼。その墜ちてゆく傾斜的な過程、及び、位置の回復。

（巻一の一～三）
（巻一の四～巻二の二、巻二の三・四）

二、女奉公人。その水平的な展開。

（巻三の一～巻四の四）

三、私娼。その更に墜ちてゆく傾斜的な過程。

（巻五の一～巻六の三）

〈終章〉

（巻六の四）

宗政は公娼と私娼のパートについて「墜ちてゆく傾斜的な過程」を見て取っている。なお、主人公が若い頃に京都

の島原に公娼として務め、年齢を重ねた後で私娼となっていることは、公娼の方が私娼よりもステイタスが高かったことを示唆しているよう。

ところで、近代日本では『好色一代女』を基にした多数のアダプテーション、翻案、パロディが生み出された。著名なアダプテーション作品に、溝口健二監督による映画『西鶴一代女』（新東宝・児井プロダクション、一九五二年）がある。小説では、尾崎紅葉『伽羅枕』（春陽堂、一八九一年）への影響がよく知られている。⁽⁶⁾ 円地文子『現代好色一代女』（講談社、一九六三年）や野坂昭如『浮世一代女』（新潮社、一九七三年）は、タイトルが示すように、『好色一代女』のパロディの要素を含んでいる。前者は、少年の頃に養子に迎え、後に娘の夫となる男性と長期にわたって肉体関係を持つ女性を主人公とする長編小説である。後者は、横浜の本牧にあったキヨホテルの名物娼婦お浜をモデルとする長編小説であり、「牛肉」と舞台が重なっている。

なお、必ずしも『好色一代女』の影響というわけではないが、近代日本では女性の一代記ないし半生記の設定を持つ小説が多数執筆された。林芙美子の作品に、戦中のインドシナに軍属（タイピスト）として赴任する幸田ゆき子の半生を描く『浮雲』（六興出版社、一九五一年）がある。敗戦後の一時期に米兵の「オンリー」となり、物語の終盤で、戦中にインドシナで知り合った不倫相手の富岡と一緒に屋久島に赴き、彼の地で命を落とすゆき子の人生に転落を見る論者もいる。⁽⁷⁾ 一方で、五六歳の相澤さんを主人公とする「晚菊」（『別冊文藝春秋』第九号、一九四八年一月）⁽⁸⁾ は、元芸妓の老いを描いている点で『好色一代女』と重なる面がある。

本稿では、「晚菊」との比較を交えながら、「牛肉」を「遊女」の転落物語として読み直すこととしたい。

2 満喜江の転落のプロセス

「牛肉」は、「木更津近くの漁村」の出身である満喜江が本牧の娼館で働いていた時期から、口入れ屋の世話を受けながら空襲による精神疾患からの回復を待つ時期までを描いた作品である。本節では、満喜江の約一〇年間の歩みを転落のプロセスに注目して概観する。

物語は、パトロンであるマッケンジイの家を飛び出した満喜江から佐々木の元に「鍵を下さい」という電話がかかってくる場面から始まる。やがて佐々木の視点から満喜江との出会いが回想される。それによれば、かつて満喜江（マキイ）は本牧のメエゾン・ビオレの「売れっ子」だった。未だ女性を知らなかった佐々木は「有力な或る人の紹介」により、同僚に連れられてビオレを訪れ、「ママさんの特別のはからひ」で満喜江と一夜を共にした。当時、佐々木は二六歳、満喜江は二一歳だった。以後、佐々木は「マキイのペット」のようになり、「無理な借金」もしながら毎日のようにビオレに通った。

かつて横浜の本牧には、外国人遊歩道の沿道に生まれた外国人向けの休憩所を起源とするチャブ屋街があった。^⑨チャブ屋とはバー、キャバレー、スナック、喫茶店、ダンスホール、娼館をミックスしたビジネスで、キヨホテル、スターホテルなどが有名である。キヨホテルの名物娼婦であったお浜は海外でも知られ、前述の野坂昭如『浮世一代女』や小堺昭三『メリケンお浜の一生』（波書房、一九七二年）に描かれる主人公のモデルともなった。なお、谷崎潤一郎は一九二一年九月から二二年一〇月まで横浜市本牧に住み（二二年一〇月に横浜市山手に転居した）、その体験を

元に「本牧夜話」(『改造』第四卷第七号、一九三二年七月)や「港の人々」(『婦人公論』一九三三年十一月、原題「横濱のおもひで」)を執筆している。⁽¹⁰⁾

横浜港近くに立地したチャブ屋は外国人船員を客として発展したが、大正半ば頃、警察の方針によって小港(本牧)と大丸谷(石川町)の二カ所に集められた。関東大震災後、本牧のチャブ屋には会社員など経済的に余裕のある層の日本人客が出入りするようになった。チャブ屋にはモダンでハイカラなイメージがあり、チャブ屋で働く「遊女」は上質とされ、稼ぎもよかった。重富昭夫は、戦前にチャブ屋通いをした客による以下のような証言を記録している。

チャブ屋は、粋な人、通な人、遊びなれた人でないと行きません。要するに、バタクさくて、ハイカラな人たちです。⁽¹¹⁾

いずれも玉ぞろいでね。斡旋業者が地方からも選りすぐった女を集めてくるんです。女なら誰もいいという訳にはいかないんです。そのあたりが遊郭の女と違っていたんですね。女学校出の女もいたし、家柄もわるくない教養のある女が少なくありませんでした。それだけに娼妓としては安っぽく取り扱われませんでした。

教養があつて玉ぞろいときていのですから稼ぎも違います。遊郭の女などとはケタが違います。遊ぶにも遊郭の倍以上の料金を必要としましたし、稼ぎの方だって女郎の倍以上だった訳です。⁽¹²⁾

このようなチャブ屋のイメージは、「牛肉」のメエゾン・ビオレやメエゾン・ビオレで働いていた頃の満喜江のイメー

ジと合致する。⁽¹³⁾ 佐々木が有力者の紹介を得て入店していることや裕福な外国人が出入りしていることから、メエゾン・ビオレが高級娼館であることがうかがえる。「体格もよく、パンのやうな小麦色の肌」をしている満喜江は西洋風の健康的な女性として描かれている。

満喜江は佐々木と出会ってから一年ほどした頃に、フランス生まれのエストニヤ人で「古くから日本にゐる富有な貿易商人」であるマッケンジイに見初められ、身請けされる。

佐々木と再会した際の満喜江の西洋趣味は、メエゾン・ビオレとマッケンジイとの生活によって培われたものと推測される。満喜江は、佐々木のアパートに転がり込んできた時、「スエードの茶革のハイヒール」をはいていた。「ピンクのパンツ一つ」で佐々木を出迎えた満喜江は、まもなく「素肌にフランネルの棒縞の部屋着を引つかけると、紅革のケースから、銀の唐草模様にはめこまれた鏡を出して化粧を始」める。満喜江は佐々木が啞えていた国産の煙草をハンドバックから取り出してキリアジの煙草（エジプト産）と取り変えた後、「——ねえ、時におながが空いたんだけど、何か買つて来てよ。——パンにぼつてりとバターとチーズをつけて、リプトンの紅茶でいゝわ」と言つて買い物を頼む。

これらは裕福な西洋人に囲われる愛人に似つかわしい装いと振る舞いであるが、満喜江はパトロンを失つた今、「あんまりぜいたくは出来ない」（傍点原文）ことを自覚していた。収入のない満喜江は佐々木のアパートにいる間に腕輪や指環など「めばしいもの」を売り尽くし、約一ヶ月後に「着のみの着のまゝで」出て行つてしまふ。

その五、六ヶ月後、佐々木のもとに、本所石原町の寄寓先に荷物を送つてほしいという満喜江の葉書が届く。その寄寓先で再会した時、満喜江の状況は一変していた。佐々木が通された下町のみすばらしい長屋の二階の部屋の様子

は、次のようなものだった。

真黒い金具のついた古びた箆笥があり、角の破れた竹行李が壁ぎはに押しつけてあつた。押入れは破れて、中張りの新聞紙がはみ出てゐる。畳は黄いろく変色して艶もない。⁽¹⁴⁾

そこに、「色あせたネルの着物」を着て「パーマアもしない髪をぐるぐると襟もとでとめ」た満喜江が「手で壁をさすりながらそろそろと」入ってくる。満喜江は佐々木の留守中にアパートに連れ込んでいたインド人と別れた後、五反田で芸者として働いていたこと、性病から来る眼病を患い療養中であることを告げる。佐々木は、「見るかげもなくやつれ」た満喜江の「あまりの変りかた」に言葉を失う。満喜江は眼病が回復したら吉原の栄楼で働くつもりであることを伝え、通りかかったら寄つてほしいと述べる。佐々木は満喜江の手に二枚の十円紙幣を握らせつつも、「もう、これが満喜江と逢ふ最後だ」と思う。

しばらくの間、佐々木は満喜江のことを「思ひ出す事もなかつた」が、浅草に行つた折にふと吉原を訪ねてみようと思ひ立つ。佐々木は満喜江が「一流の店にあるもの」と思い込んでいたが、栄楼が二階建ての小さなみすばらしい妓楼であることを知り衝撃を受ける。佐々木が「場末のそば屋」のような二階の部屋に案内され、客引きの「婆さん」が蚊取線香と冷い茶を運んでくると、やがて「派手なメリンスの単衣を着て、白と桃色のたづなのしごきを大きく拡げて前へ垂した」満喜江が入ってくる。満喜江は「「まア、あんなのオ」と云つてそこへべつたり無造作に坐」り、「何でもない風な話しぶり」で佐々木と言葉を交わす。佐々木が満喜江と一夜を共にし、朝起きると、窓の外では出征

兵士の見送りが行われていた。佐々木の栄楼通いは、わずか数回で終わる。

敗戦後、佐々木は満喜江の寄寓先で出会った「をばさん」（口入れ屋であることが判明する）に駅のホームで偶然再会し、満喜江の消息を聞く。「をばさん」の話によれば、現在、満喜江は「をばさん」の家族と共に石原町の「掘立小屋」で暮らしている。満喜江は吉原で空襲に遭遇して以来「気が変にな」り、かなり回復したものの「いまだに、ぶらぶらして」といるという。「をばさん」は時代の変化がもたらした吉原の商売の困難にも触れながら、「屋台のおでん屋でもしたいなんて、ね、云つてをります」、「酒場かダンスホールにでも行けば似合ふんでせうけれど、もう、年も年ですし、からさし、お洒落の気もなくつてね、此の頃は、弟の子供の守りなにかしているンでございますよオ」と満喜江の近況を報告する。佐々木は満喜江に対する見舞金として「三枚の百円札」を渡そうと考えながらやめる。

3 佐々木の視点から見る満喜江の転落

前節では、本牧の高級娼館の「売れっ子」から裕福な外国人の愛人を経て、吉原の下級妓楼の娼妓になり、さらに空襲に遭い精神を病む満喜江の転落について見てきたが、これらはR新聞の記者である佐々木の視点を交えて語られる。西鶴の『好色一代女』では女主人公の転落の物語が女主人公自身によって語られるが、「牛肉」の場合は異なる。満喜江の転落は、本牧時代の満喜江と、それ以後の満喜江との落差をめぐる佐々木の幻滅を交えて提示される。

満喜江が佐々木のアパートに転がりこんで来た時、佐々木は「なまめかしい思ひ出」によって記憶していた満喜江を歓迎する。かつて満喜江がマッケンジイに身請けされて「自分の手もとゝかぬやうな豪奢な生活へ這入つて行つた」

時、佐々木は「さうした女を少しの間でも自由に出来た」ことに満足を覚えた。満喜江が佐々木のアパートで「じだらくな生活」をした挙げ句、無断で出て行つた後も、佐々木はしばらくの間、満喜江が戻ってくるのを心待ちにしていた。

本所石原町で再会した際、佐々木の満喜江に対する評価は大きく下落する。佐々木は「見るかげもなくやつれ」た満喜江を見て「違ふ人」であるかのような印象を受ける。佐々木は満喜江の横顔に「昔のなまめかしいおもかげ」をわずかに認めたものの、近く吉原で働く予定であることを聞くと、「以前のマキイへ対するやうな情」は消え、「早くそこを出たい気」になる。「本牧を高級なところと思ひ、吉原を品の悪いところと断じてゐた」佐々木にとって、吉原の娼妓になることはステイタスの低下を意味した。佐々木は「ごみっぽい長屋住ひにまで落ちぶれて、眼を患つてゐる」満喜江の姿を見て、「もう、これが満喜江と逢ふ最後だ」と思いつつ長屋を去る。

吉原の榮樓で再会した際、佐々木の満喜江に対する評価はいつそう下落する。満喜江の働く店が吉原の中でも「一流の店」でなく小さなみすばらしい妓樓であつたこと、満喜江の風貌や言動や嗜好が下町の庶民風のものに様変わりしていたことは、佐々木を甚だしく幻滅させる。後者に関連して、満喜江の枕元に「屑ばかりになつた刻み煙草のなかへ安物の新しい煙管が突き差してあ」ること、満喜江が佐々木との会話の中で「私、おなか空いたわ、かぼちやの甘いものが食べたい……」、「私、冷いうどんが食べたいわ」と発言していることに注目したい。これらは、かつて満喜江が佐々木のアパートで外国産の煙草を吸つていたこと、空腹時にバターとチーズのついたパンが食べたいと言つていたことを思い起こさせる。この落差が、本牧の高級娼婦から吉原の下級妓樓の娼妓への満喜江の転落ぶりを印象づけるのは言うまでもない。もはや佐々木は「満喜江と寝てゐる事」に何の感動を抱くこともできなくなる。その後、

佐々木は、数回栄楼に上がったものの、「もう、飽き飽きして」いつしか足が遠のいてしまう。

敗戦後、口入れ屋の「をばさん」から満喜江の消息を聞いた佐々木は最終的に満喜江を突き放す。佐々木は、「をばさん」の話から「子供を背中にしてぶらぶらしてゐる大柄な満喜江の変り果てた姿を想像」する。佐々木は満喜江に對して同情を感じないわけではなかったが、「をばさん」が去った後は、三百円の見舞金を渡さなかったことに「少しも心をとがめるようなものが残」らず、「満喜江の事なぞどうでもよくなつてゐた」。

物語は、「佐々木は汗ばんだ三百円で、牛肉でも買つて帰つて、久しぶりで栄養を摂りたいと思つた」という一文で締めくくられる。この一文は、佐々木にとつて女としての満喜江の価値が三百円相当の牛肉以下であることを暗示している。⁽¹⁶⁾ 男性が女性と性交することは、「食べる」という言葉で比喩的に表現されることがある。「チャブ屋」の語源の一つは、簡易食堂を意味する「チョップ・ハウス」だとされるが、⁽¹⁷⁾「チョップ」には肉の意味があり、今日では“chophouse”と言へば肉料理専門店を指す。さらに、大柄で西洋的な満喜江の風貌は牛を連想させないこともない。即ち、締めくくりの一文は、佐々木が、吉原の下級娼妓以下の価値しかなかった満喜江よりも牛肉を「食べる」ことを選択したことを示唆している。このように、満喜江の転落物語は、かつて満喜江に魅力を感じていた男性の観点を交えて語られるからこそ、この上なく残酷である。

4 佐々木の人生との対比

前節において、満喜江の転落物語が佐々木の視点から語られることを確認したが、「牛肉」における佐々木のポジシヨ

ンは、『好色一代女』の冒頭において「好色庵」を訪ねて女主人公から話を聞き出す二人の若者のような純粹な聞き手のそれではない。「牛肉」では、満喜江の人生の目撃者となる佐々木も自らの人生を生きている。

満喜江に出会った頃の佐々木はR新聞社に入社して間もなかった。当時の佐々木は大船の実家から横浜支局に通勤していた。満喜江がマッケンジイに身請けされた後に佐々木は東京の本社勤務になり、実家を兄夫婦が継いだこともあり、下宿住まいを始めた。佐々木は安い下宿に住んで金を貯めた後で、「麴町あたり」の「小ざつぱりした」弥生アパートに転居した。マッケンジイのところから逃げてきた満喜江が転がりこんできたのは、この弥生アパートである。満喜江が出て行った後、金に余裕がなくなった佐々木は、満喜江が戻って来ないことを見定めてから雑司ヶ谷の学生下宿に引越した。この学生下宿に住んでいる間に弥生アパートから転送される形で満喜江の葉書が届き、佐々木は本所石原町に寄寓していた満喜江を訪ねた。この後、佐々木は社会部に異動となり、麴町の右近ホテルに引越した。この右近ホテルに住んでいた間に、佐々木は吉原の榮楼で満喜江と再会した。

その後、佐々木はアジア・太平洋戦争開始直前に出征した。二等兵として朝鮮に渡った後は、京城、奉天、牡丹江を経て、牡丹江の近くのポウチンで終戦を迎え、釜山を経由して帰国した。復員後は、二ヶ月ほど大船の兄の家に身を置いた後、R新聞社に復職した。復職後まもなく、佐々木は間借り先である八百屋の妻の妹だった二六歳の「戦争未亡人」と結婚し、翌年には息子が誕生した。

見てきたように、佐々木は満喜江がマッケンジイに身請けされた後で「転々と下宿を変」わり、出征後は「転々と場所が変つて行つた」。こうした設定は、一見佐々木の人生が起伏に富むかのような印象を与えるが、東京市（都）内の頻繁な下宿の移動は、安下宿に住んで貯金をした後に、わずかな期間でも「ぜいたくに暮す」（傍点原文）ための

工夫であった。佐々木は新聞記者という安定した仕事に就いており、復員後も同じ会社に復職し、やがて結婚して家庭を持つ。妻の美津が「つくろひもの」の上手な女性で、佐々木が「何時も固くつくった清潔な靴下をはかされるやうにな」ったという記述は、佐々木が平凡だが幸福な家庭を築いたことを示している。もちろん戦争は物語全体に深い影を落としているものの、佐々木の出征中の動向はあっさりと言られており、「満州」で終戦を迎えたにもかかわらず引き揚げ時に修羅場を経験したことを示唆するような記述もない。テキストに即して判断するならば、戦争のダメージをより強く受けたのは、出征した佐々木よりも銃後に止まった満喜江である。

ともあれ、「牛肉」は、満喜江の波乱に富む下り坂の人生が、佐々木の安定した上向きの人生と対比されることによって、満喜江の転落の側面がいっそう際立つ仕掛けが施されている。

5 『晩菊』の場合

「牛肉」では満喜江の人生と佐々木の人生が何度か交差するが、『浮雲』では、幸田ゆき子と不倫相手の富岡の人生が、軍属として赴任したインドシナで交差した後、屋久島におけるゆき子の死まで何度も交差し絡み合う。「晩菊」では、戦中に相澤さんの人生と交差した田部の人生が、その後何度か交差する。このように恋愛関係にある男女の人生を対位的に描く手法は三つの作品に共通するが、「牛肉」の場合には女性の側の転落が顕著であり、かつ男性が女性に向ける視線の方向性が際立っている。以下では、この点を「晩菊」と比較してみたい。

「晩菊」は、五六歳の相澤さんのところに、元恋人である田部から「夕方、五時頃うかゞひます」という電話がかかっ

てくる場面から始まる（この導入は、佐々木のところに、満喜江から「鍵を下さい」という電話がかかってくる「牛肉」の導入に似ている）。きんは少女時代から「小町娘」と噂されたほどの美人であったが、養家に出入りしていた男からレイプされたことがきっかけとなり、一九歳で赤坂の芸者になる。売れっ子芸者となったきんはフランス人の「かなりな年齢の紳士」であるミッシェルを始めとして、多くの男から愛される。物語の現在において、きんは花柳界の仕事から足を洗っており、男の世話も受けず、沼袋にある持ち家で女中と二人で暮らしている。¹⁸

きんが五〇歳の時に「親子ほども年の違ふ」田部と知り合って恋愛関係に陥ったのは、きんの義妹のすみ子が夫婦で営む学生相手の下宿においてであった。田部は大学卒業後すぐに陸軍少尉となって出征したが、広島に駐在していた間に、きんは二度ほど田部を訪ねた。その後田部はビルマに移るが、敗戦後に復員してまもなく、きんを訪ねてくる。その時田部は「ひどく老けこんで」見え、「きんは昔の夢も消えて失望してしまった」。しかしその一年後に再会した時には、田部は兄の援助で自動車会社を起こし、結婚もひかえ、「見違へるばかり立派な紳士」になっていた。物語の中心となる、きんと田部との再会は、その一年後に設定されている。

再会したきんと田部は、心の中で相手をシビアに値踏みする。両者の本音がストレートに口にされることはないものの、互いの腹を探り合う二人の会話は緊張をはらんだものとなる。最終的に、田部がきんを訪ねてきたのは金策のためであることが判明し、ただでさえ老いから来る容色の衰えに敏感になっているきんは自尊心を大きく傷つけられる。

次の引用に見られるように、田部は女としてのきんの価値の下落を、若い女中と比較しつつ、シビアに判定する。

一緒に一夜を過ごしたところで、ほどこしをしてやるやうなものだと、田部は、きんのあごのあたりを見つめた。しつかりしたあごの線が意志の強さを現はしてゐる。さつき見た啞の女中のみずみずしい若さが妙に醜にだぶつて来た。美しい女ではないが、若いと云ふ事が、女に目の肥えて来た田部には新鮮であつた。なまじ、この出逢ひが始めてならば、かうしたもどかしさもないのではないかと、田部は、さつきよりも疲れの見えて来たきんの顔に老いを感じる。⁽¹⁹⁾

他方で、きんの側も、田部の男としての魅力の喪失をシビアに見定める。

きんは、両手で頬杖をついて、ぢいつと大きい眼を見はつて田部の白っぽい唇を見た。百年の恋もさめ果てるのだ。黙つて、眼の前にある男を吟味してゐる。昔のやうな、心のいろどりはもうお互ひに消えてしまつてゐる。青年期にあつた男の恥ぢらひが少しもないのだ。金一封を出して戻つてもらひたい位だ。だが、きんは、眼の前にだらしなく酔つてゐる男に一銭の金も出すのは厭であつた。初々しい男に出してやる方がまだましである。
(略) きんは、心の中で、田部をつまらぬ男になりさがつたものだと思つた。⁽²⁰⁾

もちろん、若さや美貌をアイデンティティの支えにしてきたきんの方が、異性によるネガティブな評価のもたらすダメージが大きいという非対称性はある。けれども「晩菊」において、かつての恋人をシビアに値踏みし辛辣な評価を下す、きんと田部の視点は相互的と言える。⁽²¹⁾

一方で「牛肉」の場合、佐々木と満喜江の視点は相互的とは言えない。再会する度に満喜江の価値の下落を見定め、最終的に三百円相当の牛肉以下という残酷な評価を下すのは佐々木の側である。もっとも、作中に満喜江が佐々木を値踏みする場面が存在しないわけではない。マッケンジイの元を去って佐々木のアパートに転がり込んだ時、満喜江は再会した佐々木の身なりや住居について内心で辛辣な評価を行う。

満喜江はパンを食べるだけ食べると、また煙草に火をつけて、ぱつぱつと口から煙を吐き捨てながら、何とない後悔に似た気持ちを感じてゐた。二度と昔のひとに逢ふなんて愚はしない事だと思つてゐた。紺の背広に、白いY襯衣、赤縞のネクタイと云つたあの服装の佐々木のおもかげに惚れてゐたのかもしれないと思つた。手入れのゆきとゝいた襟足の青々したところも好きであつた。いま、眼の前に見る佐々木はブラシもあてない古びた杉あやの背広に、疲れた絹編みのネクタイをしてゐた。襟足も馬鹿に汚い。うつすりと鼻下にひげを生やしかけてゐるのも油臭い感じだつた。生活の垢がつきかけてゐる男には、満喜江は何の魅力も持たないのだ。たつた一年でこんなにも男は変わつてしまふものなのかと不思議である。張りぼての西洋式なアパートで、板の上に薄べりを敷き、病院の入院室に行けば見られる、あの鉄製の白塗りの小さいベッドがあるきり。がつしりしたマッケンジイの住宅をみつけた満喜江の目には、中学校の寄宿舎にでもゐるやうな気がした。⁽²²⁾

ところが、満喜江と佐々木が二度目と三度目に再会する場面では、もはや満喜江の内面が明かされることはなく、佐々木のみが一方的に満喜江の価値を判断する。満喜江の内なる声がかれずにいることは、満喜江のおかれた状況

が徐々に困難になることも相俟って、満喜江の無力さを際立たせる効果を生んでいる。

6 満喜江の転落の背景

「牛肉」における満喜江の内なる声の消去は、満喜江の自立性の欠如と結びついているようにも感じられる。満喜江が佐々木と二度目に再会した際、満喜江は口入れ屋の管理下におかれていた⁽²³⁾。他方で、「晩菊」のきんは、芸妓稼業から得た収入を元手に財産を増やし、持ち家も確保するなど経済的に自立している。きんには板谷清次という一五歳ほど年下の恋人がいるが、きんは経済的にも精神的にも板谷に依存していない。さらに、きんは田部よりも年長である上、経済的にも優位な立場にある。

それにしても、本牧のチャブ屋の「売れっ子」であつた満喜江と赤坂の人気芸者であつたきんのうち、なぜ満喜江のみが転落を余儀なくされたのだろうか。なぜ満喜江は、体売ることで得られる機会や収入を活用して経済基盤を確立することができず、「遊女」稼業から脱却できなかったのだろうか。

「遊女」稼業から脱却する主要な方法の一つは、経済的に余裕のある客に身請けされることであろう。満喜江の場合も、一度はマッケンジイに身請けされて「遊女」稼業から脱却したのだが、マッケンジイとの関係が続かなかつたため、「遊女」稼業に逆戻りしてしまった。作中には、そのことを満喜江の自己責任であるかのようにみなす発言もある。佐々木は、二度目に満喜江に再会した際、「どうして、マッケンジイさんの家に落ちつく気がなかつたものか不思議だつたし、自分のところへ来ても、いくらも落ちつかないで逃げ出して云つたりする女心が、佐々木にはどうしても

不可解である」と考える。さらに三度目に再会した時には、「何時までもこんなところにゐちゃア、軀を悪くするンぢやないかい……マッケンジイさんのところに、どうしてマキイはゐなかつたんだろウね？」と満喜江本人に疑問をおつける。他方で、「をばさん」は佐々木に対して、「どう云ふモンですか、あなた、なかにゐました頃ね、いい旦那もつきかけてたンですがねえ、本人の方が長続きしないンでございますよオ」(傍点原文)と報告する。つまり、満喜江は吉原の榮楼にいた時も、「遊女」稼業から脱却するチャンスを持ちながら、そのチャンスを生かすことができなかったということになる。⁽²⁴⁾

満喜江がセックスワークを続けることをどう考えているのかは、満喜江の内面が明かされないためはつきりしない。ただし、満喜江はマッケンジイの元から逃げてきた際に、マッケンジイの相手が「勤ま」らなかつた事情を佐々木に説明している。

——ね、あの事で、肌がしつくり合はないつて事もあるけど、へとへとに疲れちやつて、佐々木さんみたいにしつくりしないの。本当なの……。 (略) マキイはおしまひには眠つちまふンですもの。 (略) 眠つた軀を団子のやうにこねられたつてどうにもならないでせう……。時々、水の水を飲まされるンだけど、眠い時はもう駄目。⁽²⁵⁾

右は、マッケンジイの過酷な性的な欲求に應えることができなかったことを婉曲に述べる発言であるように思われる。作中には、満喜江の発言の正当性を補うかのように、満喜江より先にマッケンジイの元に身請けされた女性が「二人ほど」いたものの、「どの女も三月とは続かないで家出をしたと云ふ風評」があることも記されている。

ところが、佐々木は右のような事情を知っていたにもかかわらず、吉原の栄楼で満喜江に再会した時、改めて「マッケンジイさんのところに、どうしてマキイはいなかつたんだろかね？」と問いかけている。満喜江は、「どうしてつて……どうでもいい、ンだもの——あのね、高いところで、ふはふは吊りさがつてたら涼しいでせうね。飛行機の中つて涼しいかしら？　目がまわらない？」と、佐々木の問いをはぐらかすような応答をする。この応答は、佐々木の質問に対する拒絶とも、自身の運命に対する無頓着さとも解釈することができる。

それにしても、佐々木の問いかけには、多少の不満があつても、金持ちの外国人の愛人である方が吉原の娼妓であるよりも幸せであるという思い込みが感じられる。もちろん、経済力のあるパトロンの愛人になることが幸福をもたらす可能性もある。たとえば、「晩菊」のさんは、フランスの紳士であるミッシェルの愛人になることで女性としての自尊心を満足させ、またその関係を経済的な基盤を築くよすがとした。しかし、満喜江にとって、マッケンジイの愛人であり続けることは肉体的に耐えがたいことだった。

経済的な見返りが得られさえすれば、特定の相手と長期にわたって親密な関係を結ぶ方が、セックスワーカーとして不特定の客を相手にするよりまだましであるとは必ずしも言えないだろう。とはいえ、マッケンジイの元を去った後、性病を患いながら、口入れ屋の管理の下で吉原の娼妓となった満喜江が幸福であるようにも思えない。このような物語の展開は、経済力のある男性の愛人や妾になることを拒むならば、より劣悪な状況で働かざるを得なくなるといふ、セックスワーカーのおかれた救いのない状況を示している。⁽²⁶⁾

7 おわりに

本稿では、「牛肉」を「遊女」である満喜江の転落物語として検討してきた。本牧の高級娼館の「売れっ子」であった満喜江は、裕福な外国人に身請けされるが、紆余曲折を経た後に吉原の下級妓楼の娼妓となり、さらに吉原で空襲に遭遇して精神を病む。このような満喜江の人生が、客観的に見て下降線をたどっていることは否定できない。

戦前から今日に至るまで、「遊女」稼業には多様な職種があるが、就労可能な職種は働き手のスペック（年齢、美貌、スタイル、コミュニケーション能力、教養、健康状態など）に大きく左右される。また、吉原の妓楼に等級が存在していたように、各々の職種の中にも働き手を序列化する構造がある。「牛肉」において、満喜江の人生が下降線をたどる理由の一つは、こうした「遊女」稼業の階層構造と関連している。高度な芸を身につけた芸妓の場合は別として、年齢を重ねて容色が衰え、心身がすり減らされていけば、働き手の商品価値が低下することは避けがたいだろう。「牛肉」には、経済力のある男性の愛人や妾にならない限り、「遊女」稼業から脱却することが容易でない事情も鋭く描き出されていた。

他方で、「遊女」稼業を続ける満喜江の人生が下降線をたどっているにせよ、満喜江の人生の目撃者となる佐々木が、満喜江の人生を過度に転落のイメージで捉えていることも否定できない。満喜江がメエゾン・ビオレの「売れっ子」だった間に客として満喜江と知り合った佐々木は、満喜江にハイカラな高級娼婦のイメージを重ねていた。そのため、満喜江が健康を損なって吉原の下級妓楼の娼妓となり、下町風の庶民的な感性を隠さなくなったことは佐々木を

甚だしく幻滅させた。これらを主な理由として満喜江に落伍者の烙印を押す佐々木の観点は、「遊女」をめぐる序列を内面化するものとも言えよう。しかも、物語は佐々木が満喜江に三百円の見舞金を渡すことを拒み、代わりに牛肉を買って帰ろうと考える場面で幕を閉じる。娼婦・芸妓・娼妓として男性から金銭で身体を買われる立場におかれてきた満喜江が、かつての男性客から金銭的な評価を下される結末は頗る残酷である。しかし、だからこそこの結末は、満喜江の転落が、男性の視点から見た客体としての女性の価値の下落によって生じていることを浮き彫りにする。

また、本稿では、満喜江の人生を転落として印象づけるテキストの仕掛けについても考察した。「牛肉」は、女主人公と（元）恋人の人生を対位的に描く点において『浮雲』や「晚菊」と似た構造を持っている。しかし、敗戦によって大きな挫折を経験する『浮雲』の富岡や、必ずしも順風満帆な人生を送っているわけではない「晚菊」の田部と違って、「牛肉」の佐々木は、安定した人生を歩むサラリーマンとして設定されている。「牛肉」では、こうした佐々木の人生と対比される形で満喜江の転落が描かれている。

他方で、きんと田部が互いの老いと魅力の喪失を内心でシビアに見定める「晚菊」と違って、「牛肉」では、異性としての佐々木の価値を辛辣に批評する満喜江の内なる声が物語の途中から消去される。口入れ屋の管理下におかれた後の満喜江の声の消去は、満喜江と佐々木間のパワーバランスの著しい不均衡に連動していると思われる。そして、そのような満喜江の描き方は、男性が性売ることを生業とする女性に対して一方的な価値付けを行うジェンダー非対称の構造をあぶり出す上で効果的に働いていると評価できる。

注

- (1) 『林芙美子全集』第七卷、文泉堂出版、一九七七年所収。本稿における林芙美子の作品からの引用は、『林芙美子全集』による（旧字体は新字体に改める）。引用箇所を示す際は『全集』と略記する。
- (2) 本稿では、セックスワークなどの接客業に従事する女性を「遊女」と総称する。なお、芸妓（芸者）、娼妓、酌婦、私娼などの言葉には差別的な含意が含まれるが、本稿では歴史的用語としてそのまま用いている。読みやすさを考慮して括弧は用いない。
- (3) 谷脇理史は「『好色一代女』の一設定」『西鶴研究序説』一九八一年、新典社、第五章において、「好色一代女」に同時代の風俗を描こうとする意図を認め、この作品を、個性を持つ女性の運命を描く一代記として読むことの妥当性に疑問を投げかけている。
- (4) 『完訳 日本の古典』第五一卷「好色五人女 好色一代女」小学館、一九八五年、四五〇頁。
- (5) 『西鶴の研究』未來社、一九六九年、一四—一五頁。
- (6) 岡保生は「この作『伽羅枕』—引用者注」を以て紅葉の一代女であると見るのは、もはや常識とさへなつてゐる」と述べている。『尾崎紅葉—その基礎的研究』東京堂、一九五三年、八三頁。
- (7) 間中宏美「林芙美子『浮雲』—ゆき子の〈転落〉をめぐる」『国文自白』第四五号、二〇〇六年二月。
- (8) 『林芙美子全集』第七卷、文泉堂出版、一九七七年所収。「晩菊」は女性の老いを描く作品として高く評価されてきた。主な先行研究に、水田宗子「〈老い〉を描く—林芙美子の『晩菊』」樋口恵子編『ニュー・フェミニズム・レビュー』④ エイジズム・をばさんの逆襲 学陽書房、一九九二年、岩淵宏子「林芙美子—『晩菊』」尾形明子・長谷川啓編『老いの愉楽—「老人文学」の魅力』東京堂出版、二〇〇八年、倉田容子「『老妓抄』と『晩菊』—尊厳の所在」語る老女 語られる老女—日本近現代文学にみる女の老い」学藝書林、二〇一〇年などがある。
- (9) 以下の記述は、平野威馬雄「本牧ちやぶや由来記」『中央公論』一九三三年一月、齋藤昌三「横濱名物チャブ屋盛衰記」『グロテスク』二巻六号、一九二九年六月、本牧のあゆみ研究会編『本牧のあゆみ』新本牧地区開発促進協議会事業部、一九八六年、重富昭夫編著『日本のムーランルージュ 横浜「チャブ屋」物語 センチュリー、一九九五年などを参照した。
- (10) 『谷崎潤一郎全集』第二六卷、中央公論新社、二〇一七年所収の「年譜」参照。
- (11) 前掲『日本のムーランルージュ 横浜「チャブ屋」物語』、一三八頁。

(12) 同、一五四頁。

(13) 林芙美子が本牧を訪れたことがあるのかどうかは不明であるが、『放浪記』第二部（初刊は『続放浪記』改造社、一九三〇年）には、語り手の「私」が女給仲間のお君さんと共に、ドイツ人のマダム・ロアが経営する横浜のカフエー・エトランゼで働く場面がある。

「波止場のそばの橋」の横にチャブ屋らしいホテルがあることから、この場面の舞台は本牧である可能性がある。一方で、『女の日記』（第一書房、一九三七年）には、主人公の伊乃が、横浜の山下公園近くのハーデマルシェンというドイツ人が経営するバーの女給をする友人から、同じ店で働くよう勧められる場面がある。

(14) 『全集』第七巻、二二九頁。

(15) 吉原の妓楼（貸座敷）には大見世、中見世、小見世の等級があった。福田利子『吉原はこんな所でございました——廓の女たちの昭和史』筑摩書房、二〇一〇年、七七頁など。

(16) 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、一九八一年によれば、昭和二五（一九五〇）年の牛肉の価格（年平均小売価格）は一〇〇グラム当たり三七円であるので、三〇〇円あれば八〇〇グラム程度の牛肉が購入できたことになる。ちなみに、昭和二五（一九五〇）年におけるストリップ劇場の入場料は一二〇円、また吉原の遊郭のうち大店（最高級店）における遊女の揚代（泊まり）の最高料金は一二〇〇円であった。週刊朝日編『完結・値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、一九八四年。

(17) 前掲齋藤「横濱名物チャブ屋盛衰記」。

(18) 相澤さんのモデルは徳田秋聲『仮装人物』の狭山小夜子のモデルとされる柘植そよではないかとする指摘がある。野口富士男『「仮装人物」の副女主人公「徳田秋声の文学」三』、『文学界』一九七九年八月。野口富士男『徳田秋聲伝』（岩波書店、一九六五年）によれば、柘植そよは名門の妾腹の生まれで、銀座にカフエ・ライオンができたとき「美人女給の募集に応じて七人組のうちの一人となった」。「これを振り出しに新橋で左棲を取ったかと思うと吉原の遊女になり、二、三ヶ月で落籍されると「お職で威張つてられるのが嬉しさに」また吉原へ舞い戻った揚句、一しよになった株屋の男とも別れてドイツ人の貴族で武器商人の男と七年間同棲したあと、一時芝公園の近くに家を持った」（四八二頁）。そよが『仮装人物』にも描かれる待合を開業するのは、その後のことである。きんのモデルが、そよだとする仮説が正しいとすれば、花柳界を渡り歩く点や、外国人の愛人となる点で、そよが「牛肉」の満喜江にも影を落としていると考えられないこともない。

- (19) 『全集』第七卷、四三頁、傍点原文。
- (20) 同、四六―四七頁、傍点原文。
- (21) 木谷喜美枝は『晩菊』〈林 芙美子〉『国文学 解釈と鑑賞』五四卷四号、一九八九年四月において、田部の老いはきんにとって「彼女自身の「老い」の本性を見せつけ」る「あわせ鏡」であると指摘している。
- (22) 『全集』第七卷、一二五頁、傍点原文。
- (23) 佐々木は「をばさん」との会話によって、マッケンジイのところから逃げてきた時点ですでに満喜江は口入れ屋と関わりがあったことを知る。
- (24) 他方で、「をばさん」による「木更津の家もお父つあんが飲んだくれで、お母さんが違ひますしね、五人も下に小さいのがあるンで、始終、満喜さんが軀を張つてかなくちやアならないンで、あのひと苦勞のしどほしなンでございますよ」という発言は、家庭の事情が満喜江の「遊女」稼業からの離脱を困難にしていることも示唆している。
- (25) 『全集』第七卷、一二三頁。
- (26) 岩淵宏子は、満喜江が「自ら男を選んでいる」とことと指摘し、「客を選ぶべからず、という〈掟〉に抵触した」ことが満喜江の「転落」をもたらしていると指摘している。岩淵宏子「売春婦たちの〈掟〉——林芙美子『ボルネオダイヤ』『牛肉』『骨』」岡野幸江・長谷川啓・渡邊澄子編『買売春と日本文学』東京堂出版、二〇〇二年。